大岡元岡維則著

政談

村井長菴調合机

二編

中

ヘ14
873
5

へ14
873
5

へ14
873
5

大岡政談 村井長庵調合机巻之五

元岡維則編次

第九回

毒婦奸醫と言法しそ一刀を滅す

王維が詩に曰く。孰か知らん迎庭に向て苦まざるのを維死せるも
好者の香と雪んと。去まで大年孔世に係らず。忠信の若しか
死せる。苦とせる事なり。使者の帰り。使者の帰りを待て。古を
の寃枉を救んと思う。寃枉を救んと思う。寃枉を救んと。
るを遂んとて。疑ふ事あり。遂に命を捨て。
より使者なるべし。百日も在孫まるに及ぶべ。遂に忠を遂ぶ。
出よ。和尚とぞ。さき海に。我人永く善根を弔ひ給せん。仏地

まで。あとをうるるの恥。大樹を怨むとて。及ぶまじき知るべの源
兵衛代の強盗。成べき男と覚悟して。密に蒔絵の手箱を
ぬすむ。通りをいかく強盗べしと云て。左衛門もまた
兵衛方へ。高に人を引連て。踏込て。首を入れ手を引裂
ぐ。義を知ぬ。其の庭にて。中山左衛門が立る。長
脇ざし。大に憤りて。抜打に切て。赤裸を切殺す。
其の弟が上をと。はく。倒るゝに。長脇差で。切て出ば。僕が
切くやり上るに。逃ずして。彼僕が家に忘れ。傘の中に
ト立ゆく。全く作りにて。お事の。ふい。孫も。僕が。羅と
濡らん。仇敵ゆえ。形いきとゝ。ひさせ。と。ひくと上云事。公意に

其子弟を殺せしと。聞決作付られ。此紛に。出る村
井長右衛門。母を。抱つゝ。歩せ。出る。其の弟。
に。中間。くとも。二個とも。中口。に。分解。
仇人。へ。敵。の。足道。弟。に。
方。と。方。に。病。を。生。
けく。出。陰。結。ゆ。ゆ。
永。安。年。月。日。
くゝ。ゆ。に。死。
弟。に。
お。満。

ハ皆も聞くべき事なる方角くに義理をくけまでかなに為果めと。
無病息安堵し。家内の格式をつゝしにも。厚く礼謝申し別段
三物の四種人数知れけり。兎角にくい蕎の麦屋の高海と
長に十三歳ご夏事とゝ遊廓乃流に言ふこさいべくも。ゆうと
も捨方ずく外に使るべきく人だに泊け出で里方の世話に成ん
ようい窮に迫に至るまでに。使ふに物ごとて。終に家
財を費ずつく諸費と成。位別し岩井村を離て高海と
指入。遂に高海を出しつゝ江戸に来り。長屋を借て生涯
のやるこうと考出を告げ。母子二個食客の身乃上とあそい成り
なりゝ。初め左二郎三年目安八の三個い諸を為ぎ元日に来ふ迄。

左二郎まゝ三人を指く。小物かなる寓舎にて迄出でい為ふる書
の高低。夫婦乃帰宅を見ゝ客に安堵。心を利つ酒を蓄て。三
人ご膳と厨め。揃りて迄りのまきを去れ有りうら。左二郎はく
遂に郎ご月の上と安心せぎわべ。動静い如何に成り。御ども
五四乃年。少及しる乃有やく問ひわべ。遂い知ち破亀。世に為類
民極の不運ありいひ。事い去ゝ日居居して。稼業新ゝに居
清つゝ。難知みゝ。寓乃の三羅遂に郎に移り。経路細く
と為信まべ。左二郎種と打く歌見。高等天命如何ども
捨方世。遂り見類ゝご頃宅。今千日もまりせべ。為掛氏ご。寓
柱と結び沼ゝ去とゝ。物に巻を指り。海ゝ去ゝ。今い湖

も有らば書平い是を学ぶべし。猪肌とて脱ぎ捨て逃れに
相違に成べき。拙者あの人儀を抑て押止る。
コハ書平を書をの横死を学て。拙者ませ。何卒今死んとする
やと言葉げば。書平い書を見をつる。僕身分が夫婦にん底と
言げ。死と成べき書を救さんと為を道を為ぎ逃りたるに
百に余ぎして。我恩義も水の泡と成べし。死を極めたる成身今
いせに命捨べ益を。速く四方の五倍して。寄逢べ申ん。
お伝反故して死なしめ為べと。夫に学べ為べ。左程自ら
揚べ拙者を尋ひ為り。和主ぐん左程も尤こ去ぎ我事
一応有り。学べ切るの落見ぎる変に。死せん者無為り。

書を死ぎるるも。拙者あの人儀を助ぎ為べ。和主今べ道を助ぎ力
を為り。神魂を推て人輩の命人を書べ。拙者成が為れを
書ぎるの仇を報ぎること。深乃恩を色身死せずべ。死に
倍り為る者は人に為り。書を人を学て使べ世を送りつべ。和主
為べでは学力ぎる者い為べ。人を成て死を人為り為り。
強く者人を学て。拙者渝て書を。真平人学て程に強べ。
僕が只一滅に思べ色為り。仏の如く死ぎる命を捨べ長生
師の恩を個に力を添るで恩義が色。拙者掛為べ。恩徳を書
出を日も有べん。僕が拙者に成て吹に人付べ。恩徳つ
て左程べ為べ。竟小数を為て。捨べ号を体る為べ。

若衆八十五年に成ひ。家業の後も。家を力と落ち〜居たれ
ども。我こと二人は今こそ。無拔に成き。つ刎もまく。跡の客止と同んと
成まで。三年も元こと同じ。主て郎夫婦に餐魚の礼をと迷。
小梅と言出つ。無拔さして却り。誠に面倒い夫婦に成ひ。
國綱の一刀。我こ奪ひて。夫婦と相語り。必のにして後源せん
と。お宿成せば主年て。呵々と打笑ひ。國綱の刀。偶人
に見せ〜事も有り。彩る雛の生ぜんりと計り。吾俗迷にん
と思ひ。長嶋子にを知らせずして。栖と鞘に合べき。無落の刀
を求て入替おきたり。まの玉鍔の刀。密に別の拵と仕り我
太刀に帯〜ひき。悪く拵直り来たり。こいうとあれも。若嶋子

が亡父の遺物なる宝刀我が家科の双刀二腰なるに。國綱を帯し
りんと云つ。夫婦の間さて難乃起るとも。ぬるんと彼を寄〜。
主宮に預して。彩ふ計ひ。宝刀を全せり。無何他の拵へのこい長紙
帽子に為〜に見てるべ〜。此程あんくと小刀を拵くうんせけまべ。お孫
ハ強〜廣見るに。絵べくもかき。我が孫の遺物の刀こり。お孫
を夫婦こが才智に名鋼と。べ〜ばるを拵びさるにても。どつの名ふ
彩ハ拵と仕りまひ〜。お身心を用ひ。ひたまでこそ。今こ〜ふ
たり。あが孫の帯こて。彩連添ふ。ハ身が不相こ今こり
改て第〜まべ〜。心を安く彩少常〜ふと。まに濃り〜まべ長年
お長ひ。長寿こと生ひ。宝刀の家に立あが〜常せざるも幸こに

有るべき。云らべくもなく常とべ〳〵て。呼り他へ出る毎に。獨間と敷さ
ざりし。云にても富貴。力と落し。岳んと。主人殿と。呼て。
結上来りに。家業つゞ宅へ帰きるに。当時名主つ。情る所に仮
して。小切勘乃渡世をやゝ。可なりに暮らしけるこゞ。異
俵をゝ富貴子と。引ゝり。家に枝助〳〵をつる。彩こゝ。富を
ものみと。ゞ。主人の家に有りとゝへども。支婚遠き昇ゞ花科。格り行ると
只管に思ひ。利益の性なゞ。再び彩とゝげ。支婚の恩為
と言ゞんとゝ。ふ尋思をるめゝ。思ち多めへ。主人を将て返
り来るをつゝ。ゝ〳〵力を拾。逆はるとお傳成とに。名主を傾
て。名家を衰をる者ゝ。鬼角ゝ〳〵主人も言れ。結上にある

丸山左一郎尋わ来りけるこゞ。大に怒びゝ。そゞ吐者ゝの高義
の恥を落つて。呼るゝ何と問ふに。左一郎物りに依め。屋へ再び立
間を彩ふゝて。確る證有るゝ。ぬるゝ。ふにを怪方ゝ。支
との天運と帰め。一子遠を助を成せゝめ。養掛の家を起
さるるにゝ〳〵。忠義者きゝ者も有るかゝ。若き月日を
活ふゝ人殺ゝの賊を雲ゝ出るゝも。ゝん。主人何ゞ我ゝ
主ふ活め況ゝざるゝ。我宅世有て。式論と已に心ゝ紛免をゝ
つゝん。ゝ。主人を吐ゝつ。お濡を衛ゞ。ゝ。左一郎ゞ嫌
る変言論ゝて。世に富世法術。只ゝ孤ゝ。書法
と敵。妻子世を送る方法とゝ。世成らんと述るに。左

一郎様に手遊まで。理に曲まりて。色あけまでの。お蔦も潔く死
を。と悟へ。其命ゞ閻ふ渡ひ。ゆ。彩まで。お蔦が計ひに
て。手遊に一つの家を借求め。手蔦彩の居所を定め。菓子
菓子かんどを商ひ。しめて。蔦汁の色と。自ら。見して。万事
世話渡せり。主人も亦て。仇打まで。社田組屋敷に裏屋を求め。
彩に。菓子を。摂商ふ渡世を始め。打くい。手蔦が家を見出りつ。家ふ
彩の捜索とて。ん掛ぬ。番下別況家に出び
ひり。彩刀と。望ひて。濃まる。情夫の家に十日家を送りつるに。
侍縛を。ひく。七八両の金を。情夫。ひ。借り。月の仕業を。
出陽がるるわば。彩出地に。返り来く。岩く。青柳にも。

也まず。彩の金を。奪ふ。て。迷く。面倉せでやと。遂り。毒婦
ヤ。ぐ。も。月乃。彩。先と。奪ゞ。と。沢に。金を。才。ぞ。せ。ゝ。中を。浩。く。
長。陽ゞ。家と。彩。ん。と。云。べ。と。沢。元。り。迷。く。麹町ふ。逃。ん。を
見。べ。一。彩。丹。も。及。た。お。長。彩。て。手。目の。業。長。に。自。ら。業。面。ゝ
て。岩。田。と。長。陽ゞ。家。に。使。ひ。り。お。く。蒲。ゝ。り。墓。ゝ。中。に。ゝ。ゝ。
ゝ。墓。鞋。を。解。て。結。み。ゝ。ま。べ。長。陽。見。る。ゝ。り。墓。く。使。ひ。と。沢。に
向。て。主。方。へ。使。せ。ゝ。骨。折。を。ね。ぎ。ゝ。ひ。又。岩。田。に。接。拶。ゝ。て。月。い
墓。て。ゝ。り。ゞ。長。たる。脇。桜。の。保。左。郎。主。ゞ。姉。ゞ。ゝ。ん。ゞ。ま。ゝ。り。に
て。墓。ハ。一。命。と。ま。ひ。一。個。の。使。ゝ。ま。る。兄。貴。に。別。也。宅。て。女。蔦。ゝ。に
有。ら。ん。家。の。一。云。我。ん。ふ。将。長。也。ま。ゞ。わ。べ。月。の。仕。業。必。何。福。り

徳永左一郎
そば八

左一郎説諭真平が自害を止む
あふぢ
生の辛

も。世話成さん此方と沢こうりの手紙中に。二個の仇有く。[illegible]
[illegible]るこの中に[illegible]く[illegible]と[illegible]で[illegible]
[illegible]こ[illegible]。何ハ兎も角も二相と認で
[illegible]こ[illegible]。合さん大仮けに有まゞ。こ沢迄く酒肴の手賀こと〳〵
[illegible]甲斐と思ふる打こうら。[illegible]四ハ[illegible]市こう五片計の金を
[illegible]出して。こ沢ふ[illegible]。[illegible]ハ[illegible]て。[illegible]成を〳〵金[illegible]
[illegible]さの[illegible]身の[illegible]ば。十行の[illegible]
[illegible]。[illegible]ハ[illegible]。[illegible]ハ[illegible]
金と[illegible]て。[illegible]と述べつ。[illegible]に成せば[illegible]
[illegible]。我[illegible]〳〵金の[illegible]。[illegible]に[illegible]
と掛〳〵[illegible]の毒[illegible]〳〵[illegible]百[illegible]百と[illegible]

こうらとよこと[illegible]〳〵。[illegible]の中に[illegible]
て[illegible]と[illegible]中に[illegible]。[illegible]ハ[illegible]に[illegible]。[illegible]掛
[illegible]部ゞ[illegible]。[illegible]ハ[illegible]
[illegible]。十[illegible]ハ[illegible]死せ〳〵[illegible]ハ金〳〵切害[illegible]ハ[illegible]十[illegible]
[illegible]。[illegible]ハ[illegible]。[illegible]ハ[illegible]。何と成り〳〵[illegible]
ら。[illegible]ハ[illegible]平[illegible]円の金と[illegible]
[illegible]〳〵[illegible]に切害され。其[illegible]
[illegible]部ゞ[illegible]を死せ〳〵金[illegible]
く推〳〵[illegible]ハ[illegible]四の五のと異論と申さ[illegible]。
[illegible]死[illegible]。[illegible]に切害せ〳〵[illegible]ハ[illegible]に[illegible]ハ[illegible]

実て事に落居し、ぬきうち仕の始末、[illegible]
書面に申あげ、と云き。後易くせんの相。書加へ申げ[illegible]
者と法て廷奴が業成ん却て上言し。彼[illegible]
書[illegible]
[illegible]
武士の相[illegible]
ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

十[illegible]
に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
考へ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

再三見張あんまを打て云けるハ。我眼力達せし所なり。元より見
置く者り此事相の始末して。篤見しに違ハざ。言渡せるかる
見とも云せバ。吉田ハふとり顔に三度を穎き。御身等が奇妙を感し不。
穿り所を運し。畠地に埋き乳たり。好で盗賊と成んまいなけ也
されも。左京がてあんなる老爺の敷なりとバ。縁付が如し難くとも
致てハ話発せし一刀で盗んで後にてあんと。我ハ働果せたり。
是慾に眩ミ旅らの代りと思へバこそ。左もん縁げに抱附
て。盗取し始末をて述たりける。吉蔵ハ千者与惣次が面に投
んで。身を捨殺んしより。夫も床の間に飾り置しを讃く見し
る夜ハ。鞘の塗り鍔の象眼。能虎の彫乃目貫まんど。一く目に見

皆見たべ身の代りへ。更に知らぬを刻に刀剣の隠し家と覚べさしバ。凡
手形をも見分るを得ず。底一点もなき義の手分ぬ。総て手さ
国鑑の吉作と思ひ張りあく吉田が働を褒め。此身此一刀を贈く
我に頼けられ。自ちに能き人を求め。安らく売得てて廉乃
金と成し渡さん。左いひへ。お身が手に売込まん。如何有るやを尋
に。吉田も盗みつも売くを添ハ。何も聞け出バ。急に吉蔵が云に
任せ。何卒売方に。亦ハ屋敷方などの口を求めて売込るる
是のし盗物のかれバ。眼に立さぬ様。又按摩が才覚あそこしかに計
らひあ下さいと。頼して。一刀を手に携せ吉蔵に預け。程経ての物語
して。其の後吉田ハ独り浅草へ返りける。跡に吉蔵ハ大いに不ぞ

とし長四郎と引入あべ必ずで益有るべんと吾儕者ホカたり殺害働き
あるべき所も行所絶えも成ずんば第一金の一刀まで拙者が
身代と成て書らんに。実に大金を拾りほんぬすみ運の糸
しるべ微笑を結べば書落も亦数と金。此刀法使方の
手を求て流んあ。二三百円の金に代らん為ぐ云ゆ。運の
到来せ〜くまくに手軽計と成べ〜と思〜の程者ぬ〜して畢々
手を離ぬ形ぬ。扨まハ書落に対るに第〜奪ひ金根絶
方の掛に為け。賭の為の法雑費に考へ拾るとも僅日の備者
と法〜なるべ。元〜り表と帰る彩ノ師の長崎表屋敷ハ云も支
く。百銭程に成〜なる法払借残一時経ず〜方有り

第十四　後難を恐て兇徒一婦を殺す

去程に長庵ハ。俄に一刀を呑〜て。法〜の掛ひ
を断〜。程度の癖なる強盗捕奪の止む所なけ必べ四千三四家の
身の代金も。遂に撒失しぬ。たゞ必金関係の富力を奪ふ。
只管に求る人と雲ぬ。実に拙者〜云へる一商人有り同じ
麹町三丁目の裏に住て。古間物の渡世を成〜。法〜屋敷方に
出入〜つ。家も相応に繁〜。此拙者も手ぬ。刀屋に
云ふ。家業を怠て。故る刀剣の鑑定に達〜たり。故有る
今の西法に取りわけて。元〜り銀煉せ〜通る。知る人も支く
して出入高奉の陸奥刀剣を求るる有るべ。此拙者に鑑定を乞

て。常に刀剱の周旋なる間も其のりは名ある大身の武家
より名刀を買求めたき由。依頼を受け口と掛て尋るに未ぎ
一覧に備べき程の品も他手に入らず時に。長傳をかしく見知り
者て或日両人含蔵せし折。其れ組の一万家に到来せし由を聞得く。
一覧と乞たき趣と告げ。閑暇の折を見て携へ来るべき目に
叶ふ品にし有らバ。大金たりとも惜まず引取んと約したり。長傳
熟考するに彼は諸侯方に出入多けれバ周旋の口多しかく
め何は兎もあれ一刀を見せ遣奴殿と思ふ心有るバ今相を操
つくあるを常く。寄付んと思ひに彼の眼差を携へつ。摂七が家
に来り。今日幸に宿刀を持参せり。出目に掛申べし。主人

座敷へハ畏りしが。打通りまバ摂七出迎て一間に請じ。
座定て互に礼終り。摂七座を進めて約束の一剱速く拝見を
と請れ。長傳恭しく袱包より取出し。珍らする名作之旨
で一見頼ましと一刀を渡せバ摂七ハ眼鏡を掛て鞘の鎺を外し
先拵へより見改て次に中身を委しく一覧なし。元の如く鞘に
納て長傳に向ひ。周縁の名人ハ此摂七にて候と
常の作より中々に出来と八見も勝らずに。雑物なれバ長傳面
を左右に打振り。此身我を素人と思ひ。道具屋肌の数言を
云ふや知られ丈夫の刀を贋として見捨て買ひ質を素より賎しく
実も贋るハ是古物を扱ふ商売の常く我に云ふ。癖をよく云続

成しハ家と珍実へば端士ハ何ぞと求実ひ。ハ実手に絶たる事
ども或ハ有しらずや左近国綱ハ粟田口国家が一門にて應永
の国にて番鍛冶を奉じ官左近将監に任ぜ。老て後ハ左近入
道と銘を切しと傳に有り。北條氏執権たりし時鍛錬の技ハ
殊勝なるといへども。業元の造鍛冶の遺風尚存して。時考の代毎
に著く宇内の鍛冶を召しく。天下の良工悉く。鎌倉へ群集に
此時左近国綱ハ最も第一と称して。天國綱ハ尋常の作に
非ず。僕が云変数も有らざれども。聊鑑定に修行する眼力
有ればべ決を出せべし自ハ及ぶがるくして刀心大きく横造く見
天正前後の備お刀世に所謂末備前と唱る作大凡猫宝なんど

の作なりとん所謂安綱の咽喉突り有るハ。番鍛冶時代の品に大凡
有らず。夫鑑定の口決さる。磨上或ハ無銘の物を見るに。其の風を
乃作りの傳習の癖。種々見を得る事有く。是ハ左文字とも見え又
国光とも定む後学の為に一覧て入まん。今手元に古代の刀
二振あり。則ち青江の作。一ハ粟田口の久国とて重宝して大事
前に閣き。探索なく。延ばば最前刀剣の由来を明して。心の中
篤と御考遂し。頓に二ッの刀を取揃て打眺居たり。稍少しして申けり
る。ハ見定めへ上代の刀の刀心ハ疵こ痕を返し。所も有り。大抵鑢目
消て見へず。古き国綱も其中に刀心抔なくずんば時代も要
ぞ。慈しみらく考ふれば我見る此文の事をやくべし。思ひより

まりハ拙への彫見事有り。昌山や〳〵宜くば。兵今引ん〻と云ふ。其
宿四年おそく懐り。近今屋物中もせ。右事の志願ゆく何ぞ必貴
様ん。我方とも〳〵。腕力の居らざる者人に恵さる〳〵貴ん〻。
遠〳〵祝〳〵押色〻。れを迷て悔せ。ど宿をば出め。是〻もて
是宿又一二名の刀剣高ゆ。能宝を色〻。皆悔せど目利
せ〻に。大凡好きりけるば。金五〻の一刀ありと知り。恵蒙世
ん〻もこじけ。美の如きん地〻。今ハ色に寄ひ居〻。こと百
多の金にせん〻較計たる孫宝。呉の四国の品物と成りつ。隠ふ
ハ用金〻り引更たる。二人の居候に日〻の暮も嘗〻。時経に
自日を〻〻めば。又ゆ物の如き国雑を生ぜん〻。毛に拾て。遠

易青海ゑ他出の打を殺ひ〻。を殺を殺を〻拾で。刀ハ屋物ある
而を清り。目逸と成せ〻。品類語ひめもば。跡乃活計万る。国を
永迷きに有り。如何〻せんと高儀ゆ。こ活も思案に寄を。
ゆふハ陸方なう。先美に引ならま〻。二個と。何を人分と寄云
せ〻。口数と減せ〻。活計の多人多〻め。ま〻に又何〻ら張設
の工夫もあらんと。夜意ば出ハ殺と落め。我青海を又も。義
へ貴ん〻思ふ。彼娘。標致又衆に超ゆ。ば一助の金に成り
ん。心を自ひく。汁ひ居ゆ。時後ハ無祝況に貧居る沢男な
ば。煙に為果せ難し。和を方〻でハ此事を持明る者を
ら。一汁運らすべ〻と審議に。三次ハ個管と成つ。牙微笑

五月雨を押て成しゆんみ。雖きうりゆうは有まじきと形こんるし〳〵と密語けば。出雲守計を嘗て天に告訴び。遂に移て直し。
まらば速く切て捨ひまを。我主馬が通らば。説て承知あさしめんと。逼をゆでこ次い者に。衣被とゝ名乗へ〳〵潜まある
出雲守許に参り。万の願物なるうまを語つく。大金に成る
べうるぎるの名迯と命し。拙僧参〳〵るは長崎先生の命の
金をぐ是らば。隙成ゆく家に技助〳〵。姫の高海を一度。
祝酒へ流むとて去にても無祝にハ。ひろに者ば只我が出入
ある屋敷へ主に出そとて作り幸〳〵。我が高海を名御
へ速切時に第〳〵。少身屋敷の如幸〳〵作り。高海が無祝に永禄の

食事を潜〳〵。拙僧〳〵無作り呉よ。左右をば主馬出んして。
熟計肩尾能〳〵博用〳〵と形めば。長崎も情知ぎる悪拙まをば。
人馬〳〵不福事〳〵。切時ありとて。酒法ぎ〳〵。麹町に到て肩尾
と金せ計ひてんと意ありたぐこ次い深〳〵御受事〳〵。能て麹
町へ通りり。長崎い主馬が通ると速〳〵と待受け。そが高海と
主ぎけて。主馬を招ぎ。元の屋敷を有。隠家と示して高海
とが。こ次が為へまる屋敷に。なるさせ〳〵めんと祝宴をば。
主馬い体のると思ひ。実彼事〳〵成門成せり。長崎屋敷〳〵
と心に抜ぶ形うこ。次も通り来つて。密に出雲守屋敷の都を
告をば。長崎ハ先より三度と示〳〵金せ。無祝〳〵より高海に内通

あやす

田甫の幽路に三次遠易と殺害せ
三次

有てい宜しうて。速く青海とび。他の書に移けこをんとして。をを
易にい執掌に逆行中に敷きこを。こをこを青海と連れき。
白て指掌に知己の者有けもび。文三日と移けをぬ。移てを者
も宮りしうび。長屋三郎一対を花して。長田を招くに。長田も得
しうりもび。年白い髪部を屋敷風に結ひ。侍人一個を連てく
長屋が部ふへ来り。人々に恵対して。こう出沢に。屋敷の
苗字とかうて。老女の役人くしと云つ。情事より別の金をとる
出し。カ乞うくの金。長乞ら出とよ。を易を得て人うおに乞出
せび。長易い先の日青海と将て。他へ赴き長田に逢ざりけもび。
記下の日数ありるとと知しず。滅に屋敷の如中このこ思人。繕を

進めく長田ら者に類をつき。思金青の狼何方法も知る出ず。
移ることを屋敷をもこへ。数を母も様と知へ赤侵ひ多つもこ
と老女に接打通ず。長田も紙ぐこを。を金を盗と長屋と
高慢ず。忠兵に乞返りれこ。長屋へ乞移の金を強らず。を易
に乞へ親酒に生せ。侍。屋敷に移けを。出に。平。終に乞沢と
黄母屋へ赴こて。我宅を出相方に乞こと青海と嘆母。部
まこて。婦と黄に生ままへきに祝訪め。情乞くも又下る屋敷
び金に侍の移。夏の代金を拾番に宮まめて。要減。こう。移もび
辛苦浅こて。を乞つをこ沢と長田に乞へ。移りの金をを。長屋に情に納
乞。おも乞らす情要に眺る移こう。移りに下事田かるを

易ハ長藤三次郎ごゝ思計に思絶難き。婦雅の妻迄すでも川
竹の憂身に沈ませしゝる面目ハ。爲ても因知らず。隠さ爲べく
奉公せしるゝこの思ひ。兄弟の婦と為れ。迷ん心頻に起り或
日長藤が面て。婦の妻せ〜婦家ハ。音東の業なる。婦の義る為
表ハ何方なる。為と連れて逃ぜなく。長藤と通ぜ形こゝ
盤けるとゞ長藤ハ此形見ハ婦間ト。婦の妻せ〜ハ為べく難〜
れきバ連れて逃まるも成〜難く。又婦の推文に逃すれバ。
音海に逃んるゝ迷ゝ為るに。コハ始末難〜き一難の生ぜり
と。流石好智に長たる長藤も。別策に生き途方なく。婦て
使ハ引逃せん都と示〜。只一日既に引らひ色に沈ハ密

不義と通じ居〜。密會まるゝ為こゝ為べ。長藤が情男
情実を探り知〜大に怒ら長藤ふ長藤と連せ〜ケり。長藤今
ハ身を保ぶべき家なけれバ。三次に頼ゝ為ケれ
と為ば。三次も已ゞ為中〜ケる。不義密通ゝ為り
しこゝかわ。通ゝに道ゝ。長藤に強彩〜。ゝに訴書と
告げ。長藤に宅と捕ケ〜ゝに。長藤も者〜難く。婦の妻と長
へて。婦をきゝ知に裏居を借求〜め。三次長藤が面を為ゝ。
強盗と捕へせ〜む。彩ゝ三次長藤の三個ハ始て已が為ゝ為。
改て一杯と献ぜんゝ為ゝに。長藤も手白ハ婦の手を為と捕へ
家に入〜捕〜酒盃を酌〜。難儀半に長藤喜〜。三次に酒

中へ。吾儕毛雑沓あるるの出来ちう。法師の書易場に二個の娘く逢んるとを。我と逼るるて方ゐ〻ば。雑仕の落く計し。しる事を揺り知りたる容子にて。人事に勢を。拉所と戸毎に問ありき。ゐる逢んと云ふ。色々に勢〻と。つ色でも。ひと二三日も過ちば。竟に猶ありて。在郷へ却ん。業が一て事屋へ雲ゐき。二人の娘を見有ぬさんも。計り知ることを。彼個法師の色。逼奴に拉人ちる者も出ぬるの勢ゐん。逼奴先ちり勇げ出蔑を来ぬ。ひ如ぬ。我人に強と屈るく。欺作て結果ゐ。最平呼と不後雑ゐ。実ハ此の一て仕ちり。和を に彼と良く〻客作ばと沒ハ法と高ち。彼く彼個乃国

類なりまゐる。破ちてハ安寛あ〻ば。出羽人句ど付く。云の所法に及ぶる却〻ば。大に災害と云ふ。ちう〻ぬく。主心事りみ〻ば。書きものに落に逆くるかけん。在乃色法人〻て。人報〻の法色ちう好むおぬ〻ぬ。コハ事四もの色。三個潤元に成べ〻と云に。半落も色を言に過ひ。三番の間を〻人合し。三法事りう成ちう。ちく〻ば結婚に逢さん事に難き。四月の昏言ちう遠色〻。人書き場所ふく〻報〻馬すべ〻と。多事を〻に客演〻。長陽ハ制て敵ちうる。初も事易ハ結ちを法に西ひ。市潤場に逢せんと行〻ゐ〻〻。情ひ書ちを〻ゐ目で不富ち色。高已に色に ハ々細方ちう。と知ちう。最ちハ目ちば報ちう。人色ちう吉事にひて。婚姻

を先に立て見ん。仮令遠い道るとも。雷の如く掌の
うへ月抜く成せば。長崎へ遠く押出す。あとに通る者
こそ。此を持て。今日業問させん。今日も来りなば。相
めん。始く結ねと見示き打うつ。思地丹こそ入来り去うべ。
長庵何知ぬ知れ。書易のん形の沼貝を作り。我て魚人
竜宮ある方へ。ん命掛かりこの極彩ある。見
等の深くるりに出と向雑。今日鼠くいあ天人が娘の浮に
連れき。縁引合長崎に形むに。こそかくるに。我日書方ある
だい使の雑。年後中時とに家へ来る人みり。主国と方て国
乃かへるせんと急まるに。書易い遅く出てこそに向ひ。

仮令恋こそ高い厳ふ変命
に使ひ方と形を云に。こそ
らん。月書変して結ぶ
なる書易い日の書ると遅
こそい密に出抜を陸
易夜使ひ切んと云書易
家と消る命も知るで。
使ひ切ぬこそい石変の書海に
出て。番所に出で。江戸の姫をやり。
沖の揺。中通を乗ぎ。驚き
仮令恋こそ高い厳ふ変命
に使ひ方と形を云に。こそ
らん。月書変して結ぶ
なる書易い日の書ると遅
こそい密に出抜を陸
易夜使ひ切んと云書易
家と消る命も知るで。
使ひ切ぬこそい石変の書海に
出て。番所に出で。江戸の姫をやり。
沖の揺。中通を乗ぎ。驚き

に道の遠きに心弗然ひと生じ。出家愛い何とに有るかを。如何和も老方にこそ。我の道なれば遠へ〜歩いなさるべし。如ハ仏家と問さ。三次い出家ひ元りをさにみる法師に先生も老と苦に病。今を歩延しなるべ山まい金杉とる里に最ま指別丁教も家。今ぶ〜く幸抱して歩きつも居るりさる和。落に遠ふ中田甫とで出張居へ乃もの。最拘家しき性らいなく。ふ手家も変ひ。家とを苦る。濱者の鑓指打くるべ。ま手の問遠。隣さ出遠。源漢への引導さする蒸男児。居男の薬男の子の。ふ手家に。陽さ出遠。特なる手家柄。天八寺の表拝。鞘寛げ拝さとんく〜。生昌を担つく。後ろより。呂ア力に肩先深く切込んだり。苦と叫で捲と倒さ見遠す。苦〜げる刎寄にく。情知ぬこ後を何和に高を報〜ふぞ何の科みて殺る目に遠在しも報〜てなく助て下されと云つを揚て逃出て呂下さへも宝らず。一寸二寸歩きてい物け倒さ。流り血〜母を押へて。七物ひ倒苦玉有様剛勇の三郎も見とうく昌易ど傷に三郎て市男に羅ハ少〜もあく思後さい限りなけ生で。殺されば成る双国殺方て殺ハ後さく今殺の身に強く守を生よ長落と云る恩握を見に拝〜ハ市男ど思運く必〜も我を恨るなりれ長落見より市男ど清の田畑を奪くしめたるを憤り居るこ去生べこて。手裏鉄十三清ど男に量縁りく。家も失ひ。娘も奪沈め

て。虎の道に一命をすて。捨てるのも生れたり。生れ落ちの身より奉り行るる。
而はでとて。我とて殺さるべき。剣を振るく。剣を勇が振死に。さくの業績を
掛け。狩を決て迷惑せ〜中に。中に八月二個を引ぬり。不得手生じて。
振なく。嘉海を拉女と。夢なるを。不覚刀を言止を揺らんとして。言葉へ猶り
いんと。言ってこそ。彩合を。覆ってと。敵行こそ。落ちもてこそ。言へば。
易い。殺と。寝ぬ。相は兄が。殺を世で。寄をく〜牧て。殺ってとや。アナ。
とこそとも。は清ぬ。こそは再び刀を揚て。奈うう。猶振落く。実つこぬけ
ば。ばらばらなる。ぎゃうンと。汗ふ自ら。絶ぬ。無力を。拭ひ。鞘よ。納め。死骸をば。手伝
に。歩程。遠海へ。引返こつ。こそは。言葉を。
大剛政信　村井長庵調合机巻之五　終